『　無畏　』

観劇の参考に資料をご用意いたしました。
観劇前にお読みになっても
作品を楽しんでいただくのに問題はございません。
ただ、一部作品の内容と関わっている部分もございます。
全く前情報なしでご覧になりたいお客様にはお勧めできません。
ご了承ください。

◆　参考文献　◆

◆　　年表　　◆

◆　語句説明　◆

参考文献

『無畏』の構想、執筆に際し、以下の書籍を資料として参考にしました。
執筆者及び著作権保持者に心より感謝の意を表します。

秦郁彦	『南京事件―「虐殺」の構造』
田原総一郎	『日本近現代史の「裏の主役」たち』
笠原十九司	『南京事件』
南京事件調査研究会	『南京大虐殺否定論13のウソ』
早坂隆	『松井石根と南京事件の真実』
吉田裕	『日本人の歴史認識と東京裁判』
早瀬利之	『将軍の真実―南京事件・松井石根人物伝』
花山信勝	『平和の発見平成版』
花山信勝	『巣鴨の生と死―ある教誨師の記録』

※順不同・敬称略

関連年表

1871年（明治4年）

明治政府、薩摩・長州・土佐の各藩兵を御親兵として組織し、常備兵力とする。近代日本陸軍の始まり。

1872年（明治5年）

明治政府、徴兵令を施行。翌年、発布。国民皆兵制度が始まる。

1874年（明治7年）

急速な兵制改革で生じた軍幹部の不足を解決するため、陸軍士官学校が設けられる。

1877年（明治10年）

最後にして最大の内乱、西南戦争勃発。この大規模な内戦は、経験のなかった陸軍に貴重な戦訓を与えた。この戦争後、日本軍は徐々に内乱鎮圧用の軍隊から、対外戦争を戦える軍隊へと拡張していく。

1878年（明治11年）

松井石根、現在の名古屋市内に旧尾張藩士の松井家に六男として生まれる。当時の旧武士の家の男子の典型として、職業軍人を志す。

1887年（明治20年）

日本陸軍、この頃よりフランス式からドイツ式へと大改革を行う。

1894年～95年（明治27年～28年）

日本軍、日清戦争に勝利。

1897年（明治30年）

松井石根、成城学校→陸軍幼年学校→陸軍士官学校と順調に陸軍将校への道を進む。この時代、成城学校長川上操六の薫陶を受け、「日本軍の存在理由は東洋の平和確保にある」という見識を持つにいたる。これが松井の大アジア主義の根幹になる。

1901年（明治34年）

松井石根、陸軍の最高級幹部養成機関である陸軍大学校に入学。

1904年～05年（明治37年～38年）

日本軍、日露戦争にかろうじて勝利。松井は陸大を休学し従軍する。

1906年（明治39年）

松井石根、陸大を首席で卒業。将来を嘱望され、参謀本部へと配属される。

1907年～11年（明治40年～44年）

松井石根、自ら志願して清国に駐在。1909年頃より孫文と深く交流を持つ。孫文の思想に強く共鳴し、孫文の革命運動を支援する。

1912年（明治45年／大正元年）1月

孫文を臨時大総統とする中華民国臨時政府が成立。

1914年～18年（大正3年～7年）

第一次世界大戦。欧州各国の疲弊をよそに戦場が離れていた日本軍は温存され、列強国の地位を確かなものとする。

1924年（大正13年）11月

渡日していた孫文が神戸にて「大アジア主義講演」を行う

1925年（大正14年）3月

孫文死去。国民党と国民政府内で権力闘争が起こる。最終的には蒋介石が権力を掌握する。

1927年（昭和2年）9月

松井石根、一時的に失脚した蒋介石に訪日を求め、首相田中義一との会談を取り持つ。蒋介石はこの会談の成果で事態を打開する。松井は蒋介石を孫文の後継者と認め、大日本帝国が彼と手を組んで大アジア主義を実現するという構想を持っていた。

1928年（昭和3年）5月

一部の国民政府軍が、中国山東省で日本人を襲撃する事件が起こる。日本陸軍内で蒋介石への批判が相次ぐ。

6月

満州の実力者、張作霖が一部日本軍参謀の謀略によって爆殺される。日中双方の不信感が増す一方となる。

1931年（昭和6年）9月

満州事変勃発。これも一部参謀の謀略に端を発する武力衝突であった。蒋介石は抗日の姿勢を強め、彼との連携という松井の構想は破綻する。

1933年（昭和8年）

松井石根、大アジア主義の実現を目指す政治団体、大亜細亜協会を設立。

1934年（昭和9年）8月

松井石根、現役の大将を退き予備役大将となる。

1936年（昭和11年）2月～3月

松井石根、蒋介石との関係を取り戻すために訪中。3月14日には南京で直接蒋介石と懇談する。しかし、現実的な合意は何も得られなかった。

1937年（昭和12年）1月

蒋介石、中国共産党と手を組み、日本軍に抵抗することを決意する。

7月7日

盧溝橋事件。北支における戦争の勃発。

8月13日

第二次上海事変。中支における戦争の開始。

8月14日

松井石根、上海派遣軍司令官に選ばれ、陸軍省より呼び出しがかかる。

8月20日

松井石根、司令官として二個師団を率いて出港。

8月23日

上海派遣軍、上陸を開始するも大苦戦。

9月～10月

上海での苦戦を受け、続々と日本軍の兵力が増強される。

11月5日

柳川平助中将率いる第10軍が杭州湾に上陸。戦況が一気に好転する。

11月7日

上海派遣軍と第10軍を合わせて、中支方面軍が編成される。松井石根、司令官に就任。

11月9日

国民政府軍、一斉に上海地域より退却を開始する。

11月15日

第10軍、南京を占領するために独断で進撃を開始。松井も、参謀本部もこれを追認する。上海派遣軍も進撃を開始。

11月20日

国民政府、南京から重慶への遷都を宣言。

12月3日

怒涛の進撃をした日本軍による南京包囲が完成した。

12月7日

松井石根、南京占領後の不法行為を禁じるために「南京城の攻略及び入城に関する注意事項」を各部隊に下達。同日、蒋介石が飛行機で南京を脱出。

12月9日

松井石根、南京城内に飛行機を使ってビラを撒き、降伏勧告を行う。

12月10日13時

降伏勧告の回答期限を過ぎたため、日本軍による南京総攻撃が開始される。

12月12日夜

守備隊司令官唐生智、南京より船で逃亡。以降、国民政府軍は将を失い混乱し、総崩れとなる。

12月13日

この日いっぱいで組織的な戦闘は終了し、以降は掃討戦が行われる。

12月17日

中支方面軍による南京入城式が執り行われる。松井石根、南京に入城。

12月18日

松井石根、各部隊幹部を集め、軍紀粛正の訓示を行う。

12月21日

日本軍各部隊、警備部隊を残して徐々に南京から退出。次の作戦地に向かう。

12月22日

松井石根、南京から退出。以降、独自の和平工作や、蒋介石を除いた中国人による新政権の準備などに取り組む。

12月23日

南京自治委員会が設立。「クリスマス以降はだいぶ治安が回復した」という欧米人の証言もある(あくまで欧米人にとってはである)。

1938年(昭和13年)1月16日

首相近衛文麿、「蒋介石を外交交渉の相手とはしない」という内容の宣言を行う(近衛声明)。国民政府との和平の道は完全に途絶え、日中の全面戦争に突入する。

2月21日

松井石根、中支派遣軍司令官の任を解かれ、上海を離れて帰国する。再び現役を退き、予備役になる。

3月

松井石根、帰国。凱旋将軍として国民の大歓迎を受ける。

1940年(昭和15年)2月

日中戦争における日中双方の戦没者の慰霊のために、伊豆山に興亜観音を建立。

1941年(昭和16年)12月8日

日本海軍、ハワイ真珠湾を空母艦載機で奇襲攻撃。太平洋戦争勃発。

1942年(昭和17年)6月5日

日米両海軍、太平洋ミッドウェー島付近で激突。日本海軍、空母四隻とその搭載機全てを失って大敗する。以降、機動艦隊が半減した日本軍は、米軍の物量に対しずるずると後退を続ける。

同月

松井石根、大亜細亜協会の代表として海外視察の旅に出る。2カ月以上をかけ、中国や台湾、東南アジア各地を周り、現地の親日的な指導者と交流する。帰国後は体調を崩しがちになる。健康な時は欠かさず興亜観音に参拝し続けた。

1945年(昭和20年)8月15日

大日本帝国、ポツダム宣言を受諾して降伏。

10月19日

松井石根、連合軍より戦犯指定を受けるも、病床にあったため出頭の延期を許される。

1946年(昭和21年)3月5日

前夜に親しい者を集め、宴を催した松井石根は巣鴨プリズンに出頭する。巣鴨プリズンでも毎朝、観音経をあげ続けた。

5月3日

極東国際軍事裁判(東京裁判)が始まる。

6月26日

蒋介石、国民政府軍に中国共産党軍の攻撃を命令。全面的な内戦が始まる。

1948年(昭和23年)4月16日

二年近くかかった東京裁判が結審。この後、半年以上の休廷となる。

11月4日

東京裁判、判決公判が開始される。

11月12日

東京裁判、被告への刑の宣告が行われる。松井石根他6名に絞首刑の判決。

12月23日未明

松井石根他6名、7人の処刑が執行される。松井石根、享年70歳。全員が従容と死出の旅路に向かったと伝わる。

1949年(昭和24年)1月

中国共産党軍、前年秋から続いた決戦に完全勝利。内戦の趨勢が共産党の勝利でほぼ決まる。

4月23日

中国共産党軍、国民政府首都・南京を占領。

10月1日

中国共産党毛沢東主席、中華人民共和国の成立を宣言。

1950年(昭和25年)5月1日

中国共産党軍、台湾島以外の国民政府軍の拠点のほぼ全てを制圧。実質的に蒋介石の国民政府軍の反撃は不可能となり、中国内戦が終結した。

用語解説　※作者流の解釈です

歴 史 事 件

日清戦争　1894年～1895年、日本と中国最後の支配王朝である清国との戦争。日本軍初の本格的な対外戦争。大国と思われていた清に勝利したことで、大日本帝国は大陸への足掛かりを得る。

日露戦争　1904年～1905年、中国東北地方（満州）及び朝鮮半島への南下を目論むロシア帝国と日本との戦争。日本は、欧米列強の一国であるロシアにかろうじて勝利することにより、大陸での権益を大幅に拡大させた。松井石根は中尉として出征している。

満州事変　1931年～1932年、日本と清朝に代わった中華民国との武力紛争。現地の日本軍参謀の謀略（柳条湖事件）によって開戦し、わずか五カ月で日本軍は満州全土を制圧。傀儡国家満州国の建国に至る。しかし、満州の帰属は日中関係の大きな火種となって残った。また、日本の国際連盟脱退のきっかけとなり、結果、大日本帝国は孤立の道を歩むことになる。

盧溝橋事件　1937年7月7日北京付近で起きた、日本軍と中国軍の衝突事件。多くの場合、この事件が日中戦争の発端となったとされる。

第二次上海事変　1937年8月13日からの中国軍による日本軍攻撃に端を発する武力衝突。上海戦とも。中国側は開戦の時点で、精鋭を集結させ、戦闘の準備を整えていた。一方、日本軍の戦闘準備は十分ではなく、慌てて上海派遣軍を派兵する事態になる。日本軍は大きな犠牲を払いながらも、この方面の中国軍を破り、当時の首都南京へと進軍する。この上海戦から南京占領までの一連の日本軍の行動の中で、いわゆる『南京事件』が起こったとされている。

日中戦争　1937年～1945年、北支の盧溝橋事件や中支の上海戦に端を発する日本と中国との間で戦われた戦争。全面戦争であるにも関わらず、日中両国がアメリカの中立法の発動による経済制裁を避けるために宣戦布告を行わず、呼称も日本ではシナ事変とされていた。当初短期決戦を目指した日本軍は停戦の契機を見失い、広い大陸の制圧に苦労することになる。中国を支援する米英との対立は、やがて太平洋戦争に発展してしまう。

太平洋戦争　1941年～1945年、日本とアメリカを中心とする連合軍との戦争。日中戦争に行き詰った日本は、解決の為に独伊との連携を強める。その結果、アメリカに警戒されてしまう。また資源の枯渇の解決の為に南部仏印（現在のベトナム）に進駐したことにより、決定的に連合国と対立。ついにハワイ真珠湾への奇襲攻撃により対米戦を開始する。当初日本軍は快進撃を続けるが、圧倒的な国力を誇る米軍に、1942年以降ずるずると後退を続ける。1945年、多数の犠牲を出した末に大日本帝国は降伏。連合軍の占領下におかれる。第二次世界大戦全体の犠牲者は、日本人で310万人、中国人で1300万人にものぼるという研究もある。

国・地 名

シナ（北支・中支）　漢字で支那。現在日本で使われてる「中国」に近い使われ方をした。シナ人、シナ語、シナ料理等。侮蔑的と判断され、戦後は使用を控えられている。なお「中国」の語も戦前から存在し、使用されていたが、日本人にとっては「シナ」の方が一般的だった。日本軍は、北京あたりの北部を北支。上海・南京のあたりが中支。広東・香港あたりを南支と分類していた。

中華民国（国民政府）　1912年、辛亥革命の結果成立した共和制国家。1928年からは中国国民党と蒋介石が権力を握り、南京を首都にした。このため国民政府、南京国民政府とも呼称される。権力掌握後も、毛沢東率いる中国共産党や、各地の軍閥と衝突を繰り返していた。しかし1937年、蒋介石は、毛沢東と手を結び日本に抗うことを決意する。首都南京を奪われ重慶まで後退しながらも、徹底抗戦を貫いた。日本敗戦後は、中国共産党との内戦に敗れ大陸を追われ、ほぼ台湾のみの勢力になる。

満州　現在の中華人民共和国東北部。日露戦争で権益を得て以来、大日本帝国にとって重要な土地であった。1931年の満州事変により、日本軍は満州全土を掌握。傀儡国家満州国（後に満州帝国）を建国し、実質的には日本が1945年の敗戦まで支配し続けていた。

南京　古くより揚子江流域地域の中心として栄えた歴史のある中国の都市。初めてここを首都とした王朝は三国志の呉である。1927年より中国国民党による国民政府の首都となる。1937年、日本軍により陥落。その際の日本軍による非人道行為が、駐南京の欧米人記者によって報道され、南京大虐殺として世界中に知られることとなった。

上海　揚子江河口にある国際都市。アヘン戦争の結果、開港させられたことにより諸外国人の多く住む国際都市となった。列強の資本の流入により中国最大の都市として発展。「魔都」「東洋のパリ」とも呼ばれる。数万人の日本人居留民が暮らしており、この日本人租界地への中国軍の侵攻が、中支における日中戦争の発端となった。

北京　中国北部の中心都市。現在の中華人民共和国の首都。清国時代の首都でもある。政治の中心地であり、1937年～1945年までは日本軍の制圧下にあった。

軍 関 係

皇軍（読み：こうぐん）　天皇の軍隊の意。日本軍は自らをこう称していた。

師団　軍隊の戦闘単位の一つ。独立して戦闘行動を行える最小単位とも言われる。人員数は、国、兵科、時代によって異なるが、歩兵師団ならだいたい1万数千から2万まで。率いる師団長は中将から選ばれる。

参謀本部　日本陸軍の作戦・指揮の面で大元帥である天皇を直接輔弼する最高軍令機関。陸軍の作戦における中枢であった。特に優秀とされた参謀が務める機関であったが、時代が下るにつけ、軍部の策謀の源になってしまった側面もある。

上海派遣軍　シナ事変開戦時、上海居留民と租界地維持の為に急遽編成された軍。当初の司令官は松井石根大将。参謀本部の意向で戦争を拡大しない為に最小限の兵力しか持たなかったが、やがて参謀本部内で戦争拡大派が強くなったことを受け、兵力を増強される。南京まで攻めあがった主力軍である。

第10軍　上海戦の苦戦を解決するために、新たに上海派遣軍と並んで戦うために編成された軍。司令官は柳川平助中将。南京攻略を担当したもう一つの主力軍。

中支方面軍　上海派遣軍と10軍を合わせて指揮するために編成された方面軍。派遣軍の松井大将が司令官に就任した。急遽の編成の為、司令官、参謀長、参謀若干名しかいない、非常に軽い司令部であったと言われる。数個師団→上海派遣軍、上海派遣軍＋第10軍→中支方面軍となる。

兵站（読み：へいたん）　軍事行動に必要不可欠な武器、食料、燃料、その他の物資を各部隊に行き渡らせる概念。日本陸軍は伝統的に軽視しがちな分野。

憲兵部・法務部　通常、軍事行動を行う軍司令部には、兵士の犯罪を防ぎ、検挙するための機能が与えられる。それを担当するのが法務部・憲兵部である。しかし急遽編成された中支方面軍麾下にはこの機能がほとんど与えられていなかった。

徴発（読み：ちょうはつ）　（戦時などに軍が人民から物資・人力を）強制的に取り立てること。

成城学校　現在の成城中学・高校。普通の私学だが、戦前は陸軍士官学校・陸軍幼年学校への入学に備える、全寮制の予備校だった。歴代の校長にも将官クラスの軍人が多い。

朝香宮（読み：あさかのみや）中将　松井石根の中支方面軍司令官への就任を受け、空席となった上海派遣軍司令官に就任した皇族軍人。戦後、皇族であったため戦犯指定を免れた。

石原莞爾（読み：いしわらかんじ）　シナ事変開戦時の参謀本部作戦部長。軍事思想家としても有名。日中戦争の不拡大を望むが、部下の強硬な拡大派である武藤章などが暗躍し、参謀本部を不拡大でまとめきれなかった。石原自身は、満州事変における謀略を担当しており、自分がやったことを武藤にやられたともいえる。拡大派の東条英機等軍中枢とも対立。すぐに満州に左遷される。

多田駿　陸軍きっての対中穏健派で知られる。石原の推薦でシナ事変開戦後、参謀本部の№2である参謀次長に就任する。戦争の不拡大に努め、ドイツ大使を仲介とする和平交渉（トラウトマン和平工作）まで漕ぎつけるが、南京占領により勢いに乗った日本首脳は和平条件を吊り上げ、交渉は失敗に終わる。

中国側諸々

孫文　中国革命の父。三民主義を掲げ、清朝打倒の運動を指揮する。1911年の辛亥革命が勃発すると亡命先のアメリカより帰国。孫文を臨時大総統とする中華民国が南京に成立する。日本との繋がりも深く、二度も亡命先に選んでいる。その際に交流を持った日本の知識層には多くの支援者がいた。1924年神戸にて行った大アジア主義講演は良く知られている。

蒋介石　孫文の死後、国民党の権力闘争を勝ち抜き、1926年より国民党と国民政府の権力を掌握する。外敵より内患を重視し、特に中国共産党とは激しく対立する。国内の統一を優先し、日本の侵略に対応するのはその後としていた。しかし、方針を転換し1936年には毛沢東と協力体制を構築する。孫文と同じく日本との繋がりが深い。留学先も日本であり、その後も日本を訪れている。

中国共産党　毛沢東をリーダーとし、国民政府に対抗していた勢力。抗日で国民政府と一致し、以降終戦までゲリラ戦で日本軍を苦しめ続ける。

その他

大アジア主義　欧米列強のアジア侵略に対してアジアの一体性や解放を説く主張・理念。特に互いに極東の強国である日中関係を重視し、抗日で国民政府と一致し、以降終戦までゲリラ戦で日本軍を苦しめ続ける。良好な日中関係を軸にアジアの解放を果たそうという思想。

大東亜共栄圏　大アジア主義に似ているが、こちらは大日本帝国の帝国主義的侵略を合理化する理論として利用される。

興亜観音　静岡県熱海市の伊豆山に、1940年、松井石根が建立した観音像。日中両国の戦没者を慰霊するため、南京付近の戦場の土を材料として作られた。松井はこの山のふもとに無畏庵と名付けた居を構え、朝晩登山をして、熱心に観音経を上げていたと伝わっている。

観音経　仏教の経典、法華経の一部。観世音菩薩の名の由来と功徳、その救済について説かれている。

極東国際軍事裁判（東京裁判）　第二次世界大戦で日本が降伏した後の1946年（昭和21年）5月3日から1948年（昭和23年）11月12日にかけて行われた、連合国が「戦争犯罪人」として指定した日本の指導者などを裁いた一審制の軍事裁判。

巣鴨プリズン　第二次大戦後、現在の池袋に設置された、戦争犯罪人の収容施設。

教誨師（読み：きょうかいし）　一般的には刑務所で受刑者や在監者に、悪を悔い正しい道を歩むように教えさとす人。巣鴨プリズンでは一人の僧侶がこれを担当した。

于武陵（読み：うぶりょう）　中国、唐の詩人。「勧酒」という詩で良く知られる。

「勧酒」書き下し文
君に勧（すす）む金屈指（きんくつし）
満酌　辞するを須（もち）いず
花　発（ひら）けば風雨多し
人生　別離足（た）る

訳文（井伏鱒二意訳）
コノサカズキヲ受ケテクレ
ドウゾナミナミツガシテオクレ
ハナニアラシノタトヘモアルゾ
「サヨナラ」ダケガ人生ダ

閣下（敬称）　閣僚や高級軍人に対する敬称。陸軍では少将以上の将軍を呼ぶのに用いられた。